

新世紀へ

知の序奏

た理由を背負って、それぞれのかわりの中で生きていかねばならない。だれもが主人公で、逆にだれも主人公ではない小説を書きたかった」

その中で、宮本さんの考えが乗り移っているのは、作業の現場監督を務める堀さん。工事は、環境保護派からの反対を受けているリゾート施設の建設。堀さんは自然破壊の「先兵」だ。

だが、彼に対する作者のまなざしは優しい。

高校生の一人が堀さんに、丈夫な壁ができましたねと話を向ける。ところが苦労してきた壁なのに、堀さんは「壊れたっていいんだよ。雨や風に当たりながら少しづつなんだけどね」と答える。

永続しない壁を作るといふ、ささやかな抵抗を試みる堀さん。反対派を押し切ってきた施設が、土に帰っていく。

「以前なら反対なら反対と、自分の主張が小説の中にもはっきり出た。でも堀さんには堀さんの立場、固有の内面がある。それを大事にしたかった」

一方ウォールでは、細部は克明に描かれることはない。だから、かえって会話から読み取れる登場人物の心のゆらぎがはつきりする。すべてが夢の中で起こっているように、全体的に静謐(ひっそり)なトーンが支配する。

● 掟めくりの会

「社会的な問題を書くならルポルタージュにはかなわない。しかし小説がルポとちがうのは美しさが表現できることだ」とも。

「この作品を読んだ読者から、以前と変わったと言われる。前は自分の思いを作品に吐き出すだけだった。でも今は人それぞれの悩みを伝えたい、そのためにはどうすればいいか。美しさを表現する

ことが、自分の意識を伝えられる一番いい方法だと思っ」

荒尾市生まれ。北九州大学では自治会運動に熱を入れた。が、組織に嫌気がさして、「掟(おきて)めくりの会」という奇妙な名の会を始めた。

「自治会の選挙でも一部で過熱するばかりで、ほとんどは無関心。でも選挙を年に一回、投票用紙に思い切り丸を付ける「祭」とうればい」というのが会創設の理由。

会の名前にある「掟」とは、上意下達で決められたことを指す。

掟にはめられたり、はめたりすることは嫌い。学習診断テストに疑問を持ち、教師を辞めたのも、そうした理由から。

● 過程を大切に

「でも、ウォールの堀さんのように、現場で苦しんでいる人もいる。テストに反対するのは、自分の意見表明というより、そういう人も交えて、あわてず、いっしょに考えていければ、ということ。

コミュニケーション不足が一番怖い。お互いがゆさぶりがあいい、その中で何かが生まれていく過程を大切にしたい」

事故への恐怖や親の反対、父の病気による断念、作業への疑念、堀さんへの興味。作中の高校生たちはそれぞれの思いで現場を去り、また残った。

ゆさぶられた五人はどう考え、成長していくのだろう。小説を読み終え、そう考え始めた時、彼らとのコミュニケーションが始まる。

小説に取り組む

宮本誠一さん(37)

コミュニケーションで お互いをゆさぶり合う

昨年、部落解放文学賞を受賞した「真夜中の列車」のよつに障害者の問題をとらえた作品が多かった。しかし「ウォール」では、どこにでもいるような高校生を主人公にした。

五人の高校生は、掃除の時間に先生に声をかけられてしつこい塗りのアルバイトを始めるが、一人、また一人と去り、「ぼく」と、ベテランの堀さんが残る。

だが、「最後まで登場する『ぼく』が主人公ではない」と言っ。

● だれもが主人公

「『ぼく』以外の四人も、辞め



「小説はルポと違って美しさを表現できる」と話す宮本誠一さん

文化

(田野)